

『日本アジア研究』第9号（2012年3月）

韓国在住の中国朝鮮族を訪ねて ——問題発見の旅——

金銀実*

私は1985年に中国吉林省延辺朝鮮族自治州にある朝鮮族と漢族が共存して暮らしている発電所村で生まれた。特殊な生活環境の影響で、私は小学校に入る前から、自分の民族について知っていた。民族について知っていながらも、小学校の高学年になるまで韓国の存在を知らないまま暮らしてきた。そんなある日、叔父が韓国へ出稼ぎに行くようになり、それをきっかけに韓国に興味をもつようになる。それ以外にも、私のまわりでは、家族を含む多くの親戚たちが、延辺を離れて、中国の都市部へ、韓国へ、と移動をする人たちが多く、それを当たり前のように受け止めながら、暮らしてきた。

しかし、大きくなるにつれて、それは決して普通のことではない、朝鮮族に特有のことであるのに気が付き、大学院で研究することにした。そのなかでも、特に朝鮮族の移動が目立つ韓国への移動をめぐって、修士論文を書こうと思い、埼玉大学から韓国の高麗大学に交換留学をした。しかし、当初、まわりの朝鮮族の友達に「韓国人の朝鮮族に対する差別はもうあまりないと思うし、それを研究テーマにして意味あるの？ せっかく日本に留学しているんだから、日本でできる研究テーマを選んで研究したほうがいいんじゃない」と反対されたこともあった。

韓国では、朝鮮族教会、城南教会などを訪れて、フィールドワークをおこなうと同時に、在韓国中国朝鮮族18人に聞き取り調査もおこなった。半年間のフィールドワークと聞き取りを通じて、「中国が影響力を持つようになってきたから、韓国人が朝鮮族を差別しなくなった」と一言では言いきれない、在韓国朝鮮族の人々がおかれた状況は十人十色、百人百様だということを知った。また、在韓国中国朝鮮族の各人がもっている資源、置かれた境遇、制度的なものなどによって、その人たちの韓国での生活体験への意味づけ、アイデンティティ構築（変容）が違ってくることもわかった。

今回の調査ノートは主に、私の身のまわりで起きたことと在韓国中国朝鮮族18人からの聞き取り事例だけに基づいて書いたもので、全体状況の把握に欠けているのは事実である。だから、今回の調査ノートは、今後より多くの韓国在住中国朝鮮族に聞き取り調査を実施し、彼ら／彼女らの存在のありようについて、多様性を描出しつつ、全体状況の把握に努める入口にしたいと考えている。

キーワード：中国朝鮮族，コリアン・ドリーム，国際労働力移動

* キム・ウンシル，埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程1年，社会学。

1 問題意識の根っこ——自分史とからめて

1.1 「工人」と「農民」／朝鮮族と漢族

私が生まれたのは、中国吉林省安図県の愉樹川（ユスツチョン）という村である。愉樹川は小さな村だったが、火力発電所があり、農業従事者は3分の1にすぎず、それ以外の人たちは発電所に勤めていた。村では農業をしている人たちを「農民」と呼び、発電所に勤めている人を「工人」と呼んだ。私は両親とも「工人」家庭の子どもだった。当時、「農民」と「工人」の家庭では生活レベルがぜんぜん違って、私たちは5～6階建ての団地に住んでいるのに対して、農民の人たちは藁葺きの家に住んでいた。学校でも農民の子と工人の子は服装から判断できた。農民の子どもたちはボロボロな服を着ていたのだ。さらに、農民の子たちは農民の子どうしで遊び、私たちはまた私たちのグループで遊んでいた。当時、村で農業をしていたのはほとんどが朝鮮族で、およそ100世帯のうち漢族は3～4世帯しかいなかった。その代わりに、発電所に勤めているのは漢族の人たちが多かった。

父は酒を飲むと必ず、私の祖父の話をした。祖父は朝鮮で生まれてすぐ、両親に連れられ咸鏡道から中国の東北部にきた。生活は貧しく、6歳のときから道端でマッチを売っていたという。16歳のときに共産党へ入党。抗日戦争、内戦のときには地下党員として活動した。その功績が認められ、中華人民共和国が設立後、今でいうと省長（日本の県知事）にあたる地位に就いたが、43歳で早逝した。だから、その後継ぎとして子どもたちはみんな「工人」になるはずだったが、父以外はみんな「農民」になってしまった。その理由としては、祖父が死亡後、すぐ、長男である父が「工人」になり、その後、父が兄弟姉妹を引き立てるつもりだったが、「文化大革命」が起きて、それができなかったのだ。だから、父は2010年に亡くなる直前まで、自分のせいで兄弟姉妹たちが「工人」になれなかったと悔んでいた。

父の兄弟姉妹はみんな農業をしていたため、私が小さい頃よくうちにお金を借りに来たのを覚えている。父は休みの日になると、まだ小学校にも上がっていない私を連れてよく農民のお友達のところ遊びに行った。私は田んぼの隣でそのうち子どもたちと楽しく遊んでいた覚えがある。だから、学校に入ってからずっとその子どもたちと遊んでいた。それで、まわりの「工人」の子どもたちに「なぜあなたは貧しい農民の子どもたちと一緒に遊んで、私たちと遊ばないんだ」といじめられたこともあった。

発電所は、発電所で働く「工人」の子どものための小・中学校を村に建設した。他の村の子どもたちはバスで1時間ぐらいかかる県の中心にある安図市学校に通っていたが、私の村にはそれと同じ規模の学校があったので、わざわざ遠いところまで通う必要がなかった。私の学校の先生たちの給料は県の学校の先生の倍くらいあったため、県の学校から優秀な先生たちが転勤してきた。私の学校は教育レベルが高いことで有名だったため、近隣の村々からも多くの子どもたちが学びに来ていた。「工人」の生徒は授業料を払わなくてもよかったが、そうでない生徒は授業料を払わないといけなかった。さらに、村にはプールや体育館などの娯楽施設も充実していたが、「農民」の人たちがそれらの施設を利用するにはお金が必要だった。「工人」の大人たちは、愉樹川での生活は延辺の中心都市である延吉とあまり変わらないと、いつも自慢げに話してい

た。

だが、2000年に中央政府が環境汚染を減らすということで、数多くの火力発電所を廃止することになり、村の火力発電所も運転停止になった。発電所で働いていた人たちは、他のところの水力発電所や電業局（配電所）に移れた人は移り、移れなかった人は親戚や知人を頼りに他の町へと去っていった。村には農民しか残らなかった。残った農民たちも、目の前の農産物の購買者がいなくなって、生活も苦しくなり、今ではほとんどの人たちが国内の都市部へ、さらには韓国へと出稼ぎに行っている。父の兄弟姉妹7人はみんな韓国へ出稼ぎに行き、失意のうちに帰郷した叔父を除いた6人が、いまだに韓国に滞在している。

発電所で技術者として働いていた父は、発電所の閉鎖とともに、県の水力発電所に移ることになり、私の家族は2001年に安図市に引っ越しをした。しかし、私は今でも帰国すると、愉樹川に足を運ぶ。楽しい思い出がいっぱい詰まっている私の故郷だが、空洞化が進んでいる。いまは全体で30世帯もない。ほとんどの人が韓国へ出稼ぎに行き、帰っていないか、帰ってきてても村には戻らず、都会で家を買って暮らしているとの話だった。

発電所の閉鎖は、確かに農民たちの離農現象を加速化したと言えるが、それがすべての原因ではないような気がする。なぜなら、発電所の閉鎖前から、愉樹川ですでに農民たちの移動が始まっていたからだ。私のまわりの人たちを例にみても、1993年に、愉樹川に住んでいた私の父方の叔父を含む何人かの人たちが韓国へ出稼ぎに行った。「コリアン・ドリーム」はこのときから広がった。韓国への移動だけでなく、中国国内への移動も同時に始まっていた。1998年に私の従姉が、北京で仕事を探したいといって村を離れた。現在は北京で韓国人ガイドをしている。同じ年に、私の兄も仕事も求めて上海に行き、韓国会社就職をした。その1年後の1999年に母も上海に行き、韓国人相手の飲食店を始めた。

1978年に中国政府が打ち出した「改革開放政策」に呼応して、朝鮮族農民たちは他のどの民族より早く中国の都市部へ進出し、生業としてキムチの商売をはじめたと言われている。実は、私の母方の叔母夫婦もそのなかの1人で、同じ村には住んでいなかったが、早くも1985年にチンタオに行き、そこでキムチの商売を10年以上していた。しかし、だんだん競争が激しくなり、いまは韓国食品スーパーを経営している。さらに、別な村に住んでいた母方の従兄が1998年に大学を中退して、上海に行き、韓国会社に就職した。

私のまわりで起きた一連のことが中国の社会的背景と連動して生じてきたことは、明らかだと思う。1992年になって中韓国交が樹立し、韓国企業が中国に進出するようになった。それにともなって、朝鮮族も延辺に留まらず、北京、天津、大連、チンタオ、上海、広州など沿海開発地域に進出するようになった。兄のような若い人たちは主に韓国関連会社の社員や工場労働者として雇用され、母や叔母夫婦のような少し年のいった人たちは韓国人を相手に飲食業や遊興業を営んだ。さらに、朝鮮族社会に「コリアン・ドリーム」が巻き起こり、大勢の朝鮮族農民たちが韓国に流れ込んだ。愉樹川の農民たちも目の前の農産物購買者がいなくなり、収入が減ったため、村を離れた人もいると思うが、多くはその「コリアン・ドリーム」の風に乗って、村を離れたと思う。

1.2 韓国を意識しはじめる

私は誰かに教えてもらったことはないが、上で述べたような生活環境の影響で、小さいときから、なんとなく「自分は朝鮮族だ」と知っていた。朝鮮族だと知っていながらも、小学校の高学年になるまで韓国の存在についてはまったく知らなかった。父は酒を飲むと、北朝鮮や金日成の話はよくしたが、韓国の話は一切しなかった。まわりの人たちも韓国のことを口にする人はいなかった。

そんなある日、愉樹川で農業をしていた叔父が、「南朝鮮」¹に行くということで親戚中を集めてご馳走をした。その食事会で私ははじめて韓国の存在を知り、さらには、みんなが叔父のことを羨ましがっているような印象も受けた。私は「南朝鮮というのはどういうところで、なんでそこに行く叔父のことをみんな羨ましがっているのか」と不思議に思った。しかし、その2年後、叔父は人を殴った罪で、韓国で6ヵ月間拘留された後、強制送還された。建設現場で働いていた叔父は、給料未払いが続き、頭に来て酒を飲んで、現場責任者を殴ったのだ。叔父は中国に帰国後まもなく精神の病いになり、今も一人で暮らしている。だから、両親は「叔父は韓国へ行くべきではなかった。韓国への出稼ぎが一人の人生を台無しにした」と口癖のように言っていた。

しかし、その一方で私は、親戚たちを含む多くの朝鮮族が韓国へ入国するのに、手段を選ばない現実も目の当たりにしてきた。今の中国朝鮮族社会を見ると、韓国抜きには論じることができないほど、韓国の影響力が大きくなっていると私は日々実感している。

2 韓国でのフィールドワークと聞き取り

2.1 朝鮮族教会、納骨堂

私は、留学先の日本の埼玉大学から韓国の高麗大学へ、2010年3月から半年間、交換留学に出かけた。そのさい、私は両親が韓国にいる何人かの中国朝鮮族の友達に電話をして、私の叔父の話をすると同時に、韓国に住んでいる朝鮮族の生活体験をめぐって調査をしたいから、これから半年間韓国に留学をすると伝えた。その瞬間、友達から「韓国に住んでいる朝鮮族を研究して何するの？ 私の母の話だと、いまは朝鮮族を差別する韓国人もあまりいないそうだよ」「あなたの叔父さんの話はもう昔の話じゃないの？ いまは中国も発展しているから、韓国人が朝鮮族にどうこうするという事はなくなったと思う」「うちの父はいま、あなたの叔父と同じく建設現場で働いているけど、技術者だから、力仕事は一切しないうえに、給料も高く、いいと言っていたよ」「なんで、発展している日本から韓国へ留学するの？ 理解できない」などと、調査はもちろん、韓国へ行く行為自体を否定する友達もいた。私は“本当にいまは中国の影響力が強くなってきて、韓国人が朝鮮族を差別しなくなったのかな”“叔父の話は昔の話なのかな”と半信半疑の気持ちで韓国に着き、とりあえず、朝鮮族が多く集まるという「朝鮮族教会」にフィールドワークに出かけることにした。

¹ 中国では韓国のことを「南朝鮮」と呼んできた。いまも年寄りなどは相変わらず「南朝鮮」と呼んでいる。中韓国交が樹立し、中国と韓国の交流が盛んになった21世紀に入って、中国国内で「韓国」という呼称が定着した。

そこで実際に私が多く目にしたのは、仕事も見つからない、住む場所も借りられない中国朝鮮族の暗い顔だった。50代～60代の人たちが多く、たまに、韓国に來たばかりの20代～30代の人たちもいた。ソウルの朝鮮族教会には多くの朝鮮族が身を寄せていた。そのなかのある人が私にこう語った。「韓国に來て住む場所も仕事もない私にとって、この教会はとてもありがたい。でも、礼拝の時間になると辛い。神様を信じない人が、2～3時間ずっと座って、伝道師の話を聞くのは耐えがたい。早く仕事がほしい」。私はソウルにある朝鮮族教会で、韓国で居場所を見つけられないまま日々を過ごしている朝鮮族の切実な思いを感じた。

また、中国朝鮮族が韓国で一番怖がっているところが3つあると聞いた。それは、出入国管理局、外国人保護所、城南教会にある納骨堂だ。この3カ所は、「あなたたちは中国朝鮮族です。中国人です」「不法滞在者たちです」「ここにはあなたたちの居場所はありません。出て行かないといけません」「出て行かないと罰金を処する上に、強制送還させます」と、つねに中国朝鮮族の人たちを苦しめているという。

そのなかの1つである城南教会の納骨堂を訪れたのは、帰国の1週間前の2010年8月27日だったが、その光景はいまも鮮明に焼き付いている。

白い布で包まれた骨壺に黒い墨で書かれた名前。そして、その隣に、まるで葬式のために撮ったかのような黒いスーツにネクタイ姿の写真。しかし、それは、天国だと信じていた韓国に入国するためのパスポート用として撮った写真であることを私は知っていた²。その一枚の写真は、韓国入国に対する希望の夢で溢れていたに違いなかっただろう。しかし、「コリアン・ドリーム」をいっぱい載せたその写真が骨壺に貼られるとは誰が思っただろう。そして、死んでも埋める場所がこの国にはないということも誰が想像しただろう。私は、多額のお金を借りて険しい韓国入国を果たし、さらにはそこで汗水流しながら働くことが、いかに無意味だったのかを、骨壺を見ながら感じた。彼ら／彼女らはもう出入国管理局、外国人保護所、納骨堂が怖くなくなった。彼ら／彼女らは「コリアン・ドリーム」から永遠に脱出したのだ。城南教会の資料によれば、韓国で毎年、仕事中に命を落とす中国朝鮮族は150人にもものぼる。その遺骨のほとんどが、この納骨堂を経て中国に戻されるか、ここで行き場を待っている。多くは不法滞在者のものであり、彼ら／彼女らの骨壺がはまだ“不法滞在”をしているという事実が悲しかったと同時に、前述した友達の認識が甘かったことにも気付いた。

2.2 在韩国朝鮮族の生活体験と意識の変容

私が聞き取りをおこなった18人のうち³、9人は出稼ぎ労働者で、3人は結

² 延辺では、パスポートを公安局で申請するが、パスポートの写真は必ず公安局で撮らないといけないのだ。公安局には写真撮影専用の部屋があって、黒いスーツも用意されている。さらに、髪の手入れしてくれる女性スタッフもいる。そのため、写真は同一化されたものとなる。私もパスポートを申請するとき、公安局に行き、そこにあるスーツを着て証明写真を撮ったため、骨壺に貼ってある写真を見て、すぐわかった。

³ 聞き取り調査をしたのは20人だが、そのなかの2人(50代と60代の出稼ぎ労働者)は聞き取りの中でお互いに悪口を言っていて、後になって聞き取り内容を公表しない

婚経験者、残りの6人は留学生である⁴。

私が聞き取りをおこなった9人の出稼ぎ労働者は、不法か合法かを問わず、ほとんどの人たちが7万円（100万円）～10万円（150万円）の手数料を出稼ぎ仲介業者に先払いし、全家族の生計と死活をかけた「賭け」をして韓国へ入国した人たちであった。そのため、ほとんどの人たちが、韓国社会で差別を受けても、「朝鮮族だから仕方がない」「お金が稼げるから我慢する」などと、差別を我慢する人が多かった。

2010年5月11日の聞き取り時点で58歳の李正花（仮名）は、2003年に多額の手数料を支払い、偽の「公務ビザ」で韓国に入国した。偽ビザだったため、80万ウォン（8万円）という安い給料で30代の若い夫婦の家で家政婦として働くことになった。若い夫婦は帰宅しても何もせず、ソファに座ったまま、あれこれと彼女に指示をだすばかりだった。李正花がキムチを漬けていて、手に唐辛子の調味料をいっぱいつけているにもかかわらず、「アジュマ（おばさん）、コーヒー」「アジュマ、ジュースこぼしたので、ここ拭いて」などと、彼女を使用者扱いしかしてくれなかった。でも、彼女は「自分は韓国人ではないから、仕方がない。中国での給料の半年分を1ヵ月でもらっているんだから、我慢するしかない」と自分を慰めながら、仕事を続けた。

2010年4月28日の聞き取り時点で47歳の呉南（仮名）は、3ヵ月の親戚訪問ビザでいままで7回韓国に入国している。4度目の入国のときにはオーバーステイをして、工場で働くようになったが、そのとき、住んでいたアパートの家主からある日突然、「隣の住民から朝鮮族と一緒に住みたくない」と苦情が入ったため、すぐ出ていけ」と言われ、保証金も返してもらえないまま、退去させられた。理不尽な朝鮮族に対する差別であると思いながらも、不法滞在だったため、差別を甘受するしかなかった。

2010年6月14日の聞き取り時点で39歳の金誠振（仮名）は、2004年に親戚訪問ビザで韓国に入国した。彼は中国で重点大学を卒業して、国営企業に就職をしたが、韓国に行きたいという気持ちが強く、中国での仕事を辞めて韓国に来了。彼は韓国で建設現場の仕事をしながら生活をしていたが、3ヵ月間も給料未払いが続き、このままではダメだと思い仕事を辞めてしまった。不法滞在だったため、声を上げて抗議をすることもできなかった彼は、自分の権利が侵害されるのをただ見ているしかなかった自分の立場を悔んだ。

しかし、1人だけだが、不公平な目にあうのは我慢できないと思い、しょっちゅう仕事を変えたり、「朝鮮族である」ことを隠しながら暮らしている人がいた。

2010年3月15日の聞き取り時点で64歳の金英子（仮名）は、1997年に多額の手数料を支払い、「偽装結婚」で韓国に入国して、10年間に8ヵ所も仕事を変えたという。彼女はどこでも韓国人より働いたのに、朝鮮族だという理由

でほしいと連絡がきた。そのため、実際にデータとして使えるのは18人になる。

⁴ 9人の出稼ぎ労働者のうち5人は、朝鮮族教会で知り合った人たちで、それ以外は親戚に紹介してもらったり、自分で偶然見つけたりした人たちである。結婚経験者3人は全員、親戚や知り合いに紹介してもらった。留学生6人中4人は、高麗大学で知り合った韓国人学生に紹介してもらい、残りの2人はさらに、聞き取りに応じてくれた留学生に紹介してもらった。

で給料はいつも韓国人より少なかった。その悔しさから少しでも給料が多いところがあれば、すぐ仕事を変えた。しかし、2007 年によりやく韓国籍を取得し、韓国人になりすまして新しい仕事を見つけ、給料も韓国人と同額をもらうようになった。金英子は職場の人たちに「朝鮮族である」ことがばれないように、一生懸命韓国人のふりをしながら暮らしているが、それでも、給料の面で韓国人と差がない、いまのままにいたいという。

また、ぎゃくに、1 人、朝鮮族であることに誇りをもって、韓国人の差別に抗しながら生活している人もいた。

2010 年 6 月 18 日の聞き取り時点で 32 歳の李美（仮名）は、2002 年に中国で大学を卒業後ただちに、研修生としてお金を使わず韓国に入国した。韓国に来て、パソコンの部品を作る会社に就職をしたが、会社内に朝鮮族に対する不信感と差別が根強く、上司に理由もなく文句を言われるときが多かった。でも、彼女は、朝鮮族であることが嫌だと思ったことは 1 回もなかった。李美は朝鮮語教師である母親のもとで育ったため、小学校に入る前から自分の民族について教えてもらっていた。だから、彼女は逆に「朝鮮族はカネのことしか考えないから、仕事を覚えると、すぐ給料の高い他のところに移ってしまう。朝鮮族には下層の一番大変な仕事をしてもらえばいい」という韓国人の朝鮮族に対する歪んだ考えこそが間違っていると思い、それを変えようと、いくら給料が少なくても、いくら文句を言われても、会社を辞めなかった。彼女は誰が何を言おうと気にせず、黙々と自分の仕事をこなし、ようやく上司に認められ、いまは部長として会社で地歩を固めている。

李美は朝鮮族であることに誇りをもって、韓国社会で暮らしていた。その反面、金英子は朝鮮族であることが嫌だと思いながら韓国社会で暮らしている。なぜこのような違う価値観が生まれたのだろう。もちろん年の差は一目瞭然だが、それ以外にも、李美には多額の借金がないということと、中国でちゃんとした教育を受けているということが大きな影響を与えていると思う。金英子は中国大動乱の時代に生まれて、学校は小学校しか通っていない。貧しかったうえに、朝鮮族だという理由だけでひどい目にあったりすることも多かったため、多くの朝鮮族が朝鮮族であることに誇りが持てなかった時代でもあった。

「朝鮮族としての自覚をもったのはいつ頃からですか」という私の質問に、50 代～60 代の朝鮮族出稼ぎ労働者のほとんどは、「知らない」「覚えていない」「そんな自覚なんか考えられる時代ではなかった。チョゴリを着るだけで、スパイだと批判される時代だった。それに、食べていくだけで精一杯だったので、民族について教えてくれる人なんかいなかった」と答えた。同じ質問を 20 代～30 代前半の留学生 6 人にしたら、自覚をもった時期はそれぞれ違って、5 人が「朝鮮族であることが嫌だと思ったことがない。出自を知ってからはずっと誇りに思った」と答えてくれた。ただ、留学生のなかで、50 代～60 代の出稼ぎ労働者のように「民族的自覚を持てなかった」と答えた人が 1 人いたが、彼女は漢族地域で育ち、小さいときから漢族学校に通い、大学で韓国語を勉強するまでは、朝鮮語が一言も話せなかった。韓国に来てからも言葉が身についていないため、韓国社会に適応できずに苦勞をしていた。

ちゃんとした教育を受けているのか、さらには、何語で教育を受けているのか、つまり、本人がもっている言語能力、学歴、技術、さらには、若さも含めたいろいろな資源、その人が韓国でおかれている立場——正規のビザを持って

いるのか、あるいは、どれだけのお金を支払って韓国に入国しているのか——、また、制度的なものなどを含むさまざまな要素が、朝鮮族の韓国での生活体験と意識変容に重要な役割を果たしているようだ。

2.3 KBS テレビ「現代版奴隷」

2011年8月、韓国のKBSテレビで「現代版奴隷」という番組が放映された。中国の東北部から韓国へ出稼ぎに来て、韓国の辺鄙な片田舎で8年間も奴隷のようにタダ働きさせられたある中国朝鮮族の実話を報道したのだ。

その番組の主人公は、60代半ばの中国黒竜江省出身の朝鮮族男性である。雇い主は、村で大きなレストランとガソリンスタンドを経営している大金持ち。ブローカーを通じて、主人公の男性を韓国に連れてきて、レストランの裏仕事、ガソリンスタンドの仕事、豚の世話、野菜栽培などのあらゆる仕事を手伝わせながらも、給料は1回も払ったことがなかったという。

よそ者、とくに報道陣がその男性に接触しないように、雇い主はたいへん警戒していたので、取材はきわめて難渋したとのことだが、その点は割愛する。報道陣は、ようやく、その男性の住まいを村民から聞き出し、夜中にそこを訪ねた。男性が寝泊まりしていたのは、野菜栽培をしているビニールハウスの一角を仕切っただけの、とても人が寝られるところではなかった。電気もなにもなく、報道陣がライトを点けてようやく中が見えてきたが、天井にはクモの巣が張り、床にはボロボロな布団が1枚と物を入れるダンボールが1つ置いてあっただけだった。

男性は日にちも曜日もわからないまま、また、中国にいる家族とは連絡がとれないまま、その空間の中で8年間を過ごしてきたという。なぜ家族とは連絡をとらないのか、給料はいくらもらっているのかという質問に、男性は「社長が電話しないようにと言った。給料はいくらもらっているかわからない」と答えた。男性の耳は殴られたらしく変形していた。足は腫れて、指で押すと痕が残るほどで、健康状態がとても悪そうにみえた。耳はどうしたのかという質問に、男性は「私の耳がどうかしたんですか？ 鏡を見たことがなくてわかりません」と答えた。報道陣が鏡を取り出して耳を見せてあげたら、「中国にいるときには大丈夫だったのに、どうしたのかな？ どこかにぶつけた記憶もないな」と独り言を言った。「誰かに殴られましたか？」と聞くと、しばらくして「いや、そんなことはないです」と答えた。

報道陣が村民に話を聞いたところ、男性が社長に殴られるのを見たことがあると言う人が何人もいた。社長が経営しているガソリンスタンドで働いている人も、男性が殴られるのを何回か見たことがあると言ったので、なんで殴っていたのかと質問をしたら、「それは自分もはっきりはわかりませんが、たぶん仕事を間違っていたか、言うことを聞かなかったからでしょう。場所を選ばず、怒鳴ったり、殴ったりしていますので、最初はびっくりしましたが、後は普通に見ていました」と答えた。

その番組を見ながら、私は最初その韓国人社長に怒りを感じ、その後、そういうことが起きているのを何もないかのように見ていたまわりの人たちが憎くなってきた。まわりの誰かがその男性に携帯電話を貸してあげて、中国の家族と連絡をとるだけでも、男性は8年間もそこで奴隷のような生活をしないですんだのではないのか？ なんで8年間という歳月のなかで、誰も救いの手を

差し伸べなかったのか？

しかし、私と同じゼミに出ている中国朝鮮族の留学生は、その番組を見て、「あの男性、頭おかしいんじゃないの？ あこまでひどい目にあいながらも、なんで8年間もそこで働くの？ あの韓国人が家族に電話するなど言ったら、しないの？ 理解できない」と、その男性を責めるような意見を述べた。また、その留学生が韓国で出稼ぎをしている自分の両親にその男性の話をしたら、その両親も「バカじゃないの？ 給料をもらえなかったら、他のところへ移ればいいのに」と言ったそう。

私もたぶん、韓国でフィールドワークと聞き取り調査をしていなかったら、同じように思ったかもしれない。私は、指導教員の福岡安則先生から、聞き取りの場面では、「自分も目の前の語り手と同じ体験をしていたら、同じように考えたのかもしれない」という気持ちになれるほど、語り手を共感的に理解する努力をしないといけないとずっと言われてきたため、今回の番組を見て、主人公の男性を責める気持ちにならなかったのだと思う。中国黒竜江省の片田舎に生まれ育ち、都会に行ったこともなければ、先進的なもの（パソコン、携帯電話）を使ったこともない人が、お金を稼ごうという気持ちだけで、はじめて飛行機に乗って、はるばる韓国にまで来て、さらには、知り合いが1人もいない辺鄙な田舎に連れられてきて、「寝るところと食事を提供する、それに1ヵ月に60万ウォン（6万円）の給料を支払うから、私がやらせる仕事をしなさい」と言われたら、私も言われたとおりにするしかなかったかもしれないと思った。つまり、男性本人がもっていた資源の程度と韓国でおかれた境遇によって、その人の韓国での生活体験と意識のありようが決まっていくのだろう。

3 おわりに

2004年に韓国の「在外同胞の出入国と法的地位に関する法律」（在外同胞法）が改正され、中国朝鮮族も在外同胞として認められたが、在米同胞や在日同胞のような出入国の自由と韓国国内での法的地位は認められなかった。それに対する同胞支援団体からの批判を免れようと、韓国政府は2007年に中国と旧ソ連地域で暮らしている同胞のための「訪問就職ビザ」⁵を新設した。親戚訪問や観光や商務などの短期ビザでしか韓国へ入国できなかった朝鮮族出稼ぎ労働者は、「訪問就職ビザ」により、多額の手数料を払わなくても、不法の手段を用いなくても、韓国語ができれば韓国に入国することができるようになった。2007年を境に、中国朝鮮族の韓国への入国手段が大きく変わったのだ。

しかし、今回の調査で私が聞き取りをおこなった9人の出稼ぎ労働者は、全員2007年以前に不法ビザで、しかも多額の手数料を支払って韓国に入国した人たちであるため、「訪問就職ビザ」が朝鮮族社会にどのような変化をもたらしたのか、出稼ぎ労働者の韓国での生活にどのような影響をもたらしたのか、

⁵ H2ビザとも呼ばれるこのビザは、中国あるいは旧ソ連地域に住んでいる、25歳以上の、韓国以外の国籍をもつ同胞で、韓国にルーツがあることを戸籍上証明できる者、親戚が韓国にいる者、あるいは、本国で韓国教育課程委員会が実施する韓国語能力試験を受けて成績が上位の者のうち無差別なコンピュータ抽選に選ばれた者に対して、最大5年まで韓国滞在と就労を認めるビザである。

までは解明できなかった。多額の手数料を払うために借金をし、さらに不法で韓国に入学した人たちと、お金を使わず合法で韓国に入学した人たちとでは、韓国に来てからの生活体験と意識の変容がかなり違うと思う。これからの研究ではこの点も視野に入れながら、調査を進めていきたいと思う。

また、自分史のなかで私のまわりで起きた一連のことを中国の社会的背景と関連づけながら書いてみたが、まだまだ事態の全体性の把握には欠けていると思う。本来ならば、聞き取りに応じてくれた18人の語り手一人ひとりからも、「あなたは、どういう経緯で韓国にきたのか？中国でのあなたのまわりでは何が起きていて、どういう影響を受けて韓国にきたのか？」などを、丁寧に聞いていく必要があったと思う。しかし、残念ながら、今回の聞き取りではそれができなかったのも、今後の聞き取りでは必ず聞いていこうと思う⁶。

Visiting Korean Chinese in South Korea: A Journey in Discovery of an Issue

Yinshi JIN

I was born in 1985 in a power plant town located in the Yanbian Korean Autonomous Region in Jilin Province where Korean Chinese and Han Chinese coexist. Due to these unusual circumstances, I had been aware of my ethnic identity since before my elementary school days. However, in spite of this awareness of my ethnicity, I did not know about South Korea until I entered the senior grade. One day, my uncle moved to Korea to work, and then I became interested in South Korea per se. Aside from the uncle, my brother, my mother and many relatives left Yanbian for the metropolitan areas in China and South Korea to find job opportunities, so I came to take it for granted.

However, as I grew up, I came to realize that this phenomenon is not common, but rather a unique occurrence that only happens in the Korean Chinese community, and so I decided to research this in depth

⁶ 本稿は、第27回日本解放社会学会大会（弘前大学、2011.9.3）での報告に大幅に加筆修正したものである。私の学会報告に対して、同学会の「優秀報告賞」選考委員長の金明秀先生（関西学院大学教授）は、次のようにコメントし、私を励ましてくださった。

金銀実さんの報告は、中国における朝鮮族のリアリティと、それから韓国における朝鮮族のリアリティを、うまく個人史のなかで接合し、そのなかに聞き取りデータを上手に落とし込むという手法で、面白かった。ただ、その個人史というのが、中国朝鮮族という民族集団の全体的な出来事の中の、いったいどこに位置づけられるのかという作業があって、はじめて社会学になる。その作業が、もう一歩ほしかった。そういう努力をどうにかたちで担保していくのか、それを聞かせてください。

本稿の最後の段落は、金明秀先生のコメントへの私なりのリプライである。

in graduate school. Since the major destination of people from the Korean Chinese diaspora is South Korea, I chose the Korean Chinese community in South Korea for the topic of my master's thesis, and visited South Korea as an exchange student from Saitama University to Korea University. However, one of my Korean Chinese friends told me, "I think South Koreans' discrimination against Korean Chinese doesn't exist anymore, so will there be any meaning to your thesis? Now that you are studying in Japan, why don't you choose some other topic available here?"

In South Korea, I visited Korean Chinese Church and Seongnam Church to carry out my fieldwork, and interviewed 18 Korean Chinese living in South Korea. As I pursued my fieldwork over half a year, I found that there are many diverse and individual stories, facts, and situations that simply cannot be reduced to the statement that "As China rose as a global powerhouse, discrimination against Korean Chinese in South Korea disappeared." I also discovered that how Korean Chinese in South Korea evaluated their lives and approached the formation of their ethnic identity varied depending on individual economic situations and circumstances.

This research note is mainly based on the interviews I conducted with 18 Korean Chinese residents whom I encountered in daily life; consequently it is difficult to argue that this case study represents the whole picture of the Korean Chinese community in South Korea. Rather, I would like to consider this note a gateway to future research covering a wider range of people and incorporating more substantial and diverse evidence.

Key words: Korean Chinese, Korean Dream, international labor migration